

## 交流会議

### 司会

皆様、大変お待たせいたしました。

続きまして、雪舟ゆかりの自治体のトップによる交流会議を始めさせていただきます。

昨年のサミットでは小・中学校における郷土学習への組み込み、修学旅行などへの組み込み、文化作品などの交流、各自治体住民のツアーなどへの取り組み、郷土芸能・物産の交流を行うことなどが決められております。

その後、この交流がどのように進みましたか、どうぞ最後まで御清聴くださいますようお願い申し上げます。

座長は、開催地の市長であります神崎市長にお願いいたします。

それでは、神崎市長様、よろしくをお願いいたします。

### 神崎治一郎（益田市長）

それでは、交流会議ということで進めさせていただきますが、おおむね時間は 12 時 35 分までということでございますので、約 1 時間 20 分でございます。

ただいま金澤先生のお話を伺って、お互いに本当に雪舟さん、身近な私どもの立場に引き寄せられたと、こんな感じがいたしております。

きょうは余り袴を着ないで、ざっくばらんにひとつそれぞれフランクにお話をしてもらったところとこう思っているわけですが、この交流会議を進めるに当たってパターンを 3 つに分けて進めたいと思います。

最初は、昨日も御参会の皆さん方には若干御紹介いたしました、それぞれの市や町の一般的な取り組みの状況等を簡単にお話をさせていただく。それで一回りいたします。

それから、二回目目は、第 1 回目のサミットを済ました後のその後の取り組みのお話とか、あるいは作品なり、自分の市・町における雪舟の足跡なり、あるいは今から雪舟文化の高揚にどういうふうに取り組んでいこうとか、そういうようなこととお話をさせていただく。

それから 3 番目には、今からきょうの第 2 回目以降、私どもの市、町での一緒になって取り組んでいきたいと思うようなことについて発言をいただく。

こういうような形で進めさせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、アイウエオ順ということで、最初に大野町長さんの方から、大体 1 回目 1 人 5 分程度ぐらいということで話をさせていただいたと思います。

### 三浦寛喜（大野町長）

御紹介をいただきました大分県大野町の町長の三浦でございます。

時間に制約がありますが、5 分間ということで、今お話のありました最初に町の一般的な取り組みにつきまして、御紹介を申し上げたいと思います。

皆様方のお手元におありかと思いますが、話の内容等を要約させていただくことが進行

上いいかと思われます。12 ページのところにもそのことがありますが、私の町大野町は、大分県の県庁の所在地大分市から熊本の方向に 42 キロ離れた地点にあります。大野町は、大友能直並びに大友宗麟、大友一族の発祥の地といわれておりまして、現在、人口が 6,749 人でありまして、農業を基幹産業とする農業立町です。したがって、何とかこれから冷え切った農業の活性化を図らなければならないということで、20 年前から新しい農業に挑戦するために、20 年かけてまして経費 130 億円、そして 1,160 ヘクタールの畑総畑かん事業、いわゆる土地改良事業を行ってまいりました。そのために、340 万トンの水がめであります師田原ダムを構築いたしたわけでございます。

昨年 7 月 2 日九州の方、特に大分県から熊本にかけて、いまだかつてない大きな水害があり、そのときに私どもの町も 20 億円を超す大被害を被ったのであります。ようやく今、その復旧もほとんど終わりつつありますけれども、御承知のようにそうした後、今度は干ばつが続きました。さらに、台風のダブルパンチによってかなり衝撃を受けるような事態が起きました。にもかかわりませず、そうした 20 年間の生産基盤を整えました耕地、果樹園も含めまして大体 1,670 ヘクタールありますが、その産物等も干ばつときにはかん水が威力を発揮し、そしてその他についても非常に施設関係のこの農業経営というものが案外順調にまいりまして、平成 2 年度の農業総生産額の目標でありました 38 億 6,000 万円を突破するというようないい結果が生まれたわけであります。

本年は大体 40 億円を目標にして農業に取り組んでいるわけですが、私どもの住む大野川の上・中流域には、荒城の月で有名な岡城のある竹田市を中心に、12 市町村がございます。この 12 市町村の農業を活性化していこうと、21 世紀に向けた新しい農業ということでフライト農業、いわゆる農道離着陸場による新鮮な野菜を 1 時間でも早く消費地に運ぼうということで、軽くて、小さくて高価な施設園芸、中でも季節外れの、季節を先取りするような農業というものに取り組むために、全国で初めて、岡山県の笠岡市と同じく農道離着陸場、いわゆる農道空港が、ことしの 10 月に完成をいたすわけであります。これに夢を託しながら関係 12 市町村が、新しい農業に向けて挑戦をいたしております。

それらの産物につきましては、資料にありますから省略させていただきますが、小物野菜から花卉の施設園芸ということで、小さな面積から大きな所得を上げようと頑張っております。今までのところ、いいもので大体 1 キロが 1 万円を超えるようなワラビとか、あるいは小ネギにしてもスイトピーにしても、あるいは生シイタケにいたしましても、かなりの成績を上げているわけであります。

このように、集約的農業というものが土地利用型農業、今までの米・麦農業から集約的農業というような施設園芸に移管をしながら活性化を図っているところであります。

同時にまた、私どもの町は耕地が広くありまして、山野も町全面積の 70% を占めております。そうした恵まれた自然と牧草とを利用しながら、畜産の振興を図ろうと今取り組んでおります。銘柄、産地化をするためにはやっぱり質のいい黒牛和牛の生産をしなきゃならぬということで、昨年から飛騨高山の元牛を導入させていただきまして、昨年在 7 頭、

今年に入りまして 10 頭、計 17 頭を今導入して取り組んでいます。

あわせて、5 年前には本県でありましたが、全国蓄産品評会、いわゆる共進会がございました。5 年間に 1 回ありますが、来年は 5 年目になりますが、大分県の湯布院を中心に全国蓄産共進会が展開されるわけでございます。これらに向けまして先ほど申しました外国市場と対決し、あるいは国内産地間競争をしながら銘柄、産地化を図ろうと蓄産の振興に取り組んでいるところでございます。

以上が、大体私どもの町、大野町におきますところの状況なり、取り組みの状況でありまして、時間の関係で残された問題は次に回させていただきます。

ありがとうございました。(拍手)

神崎治一郎(益田市長)

ありがとうございました。

それでは引き続いて、川崎町長さん、お願いいたします。

福永一雄(川崎町助役)

川崎町でございます。

今日、原口町長の名前が出ておりますが、町長は、昨日サミットの打合せ会には出席しましたが、急用が出来まして今朝帰りました。かわりまして助役の福永でございます。紹介させていただきます。また、町長が皆様によろしくということでございましたので、お伝えしておきます。

川崎町は、福岡県のほぼ中央部にございまして、昔、筑豊炭田の中に位置していました石炭の町でございます。昭和 25 年ごろが一番盛んな時でございまして、その当時は石炭の生産量も筑豊地区でも一番多かったし、また人口も当時 3 万人を超えておりました。一番多いときは 4 万 5,000 人おりました。

現在は、面積が 36 平方キロで、人口が約 2 万 3,000 人、世帯約 8,500 世帯でございます。現在、石炭はもう影も形も無くなりまして、今は農業を中心とした、住宅と緑の町づくりに務めております。

川崎町にも縄文、弥生の石棺が発掘されまして、これも町としましては大切に保護していかなければならないと思っています。

川崎町から福岡は、車で所要時間約 100 分かかります。北九州の小倉で約 40 分かかります。交通の利便も良くなりまして、これからは工業の関係で発展していくのではないだろうかと思っております。

川崎町の普通会計予算は、年間約 130 億円から 150 億円です。福岡県の町村は 75 ありますが、町村の予算規模と致しましては一番大きい予算規模でございまして、その内の約 50% が投資的事業に使われております。これは、先ほど申し上げましたように石炭産業が無くなりまして、それに変わるべきものとして産炭地振興の事業等があるわけでございます。例えば圃場整備をしたり、道路を造ったり、老朽化した炭坑住宅を改良するための事業等があるためです。予算が大きいのはそういう理由でございます。

町の行政の目標と致しましては、パンフレットに書いておりますように、「ふるさとを愛し、ふれあちの町づくり」を掲げております。それに三つの運動として体力づくり、あいさつ運動、町の美化運動を挙げております。これらは、当然で常識的なことですが、実践をすれば必ず成果が出ると確信をしています。このあいさつ運動を実践しますと、今まで炭鉱での収入により、少し贅沢な生活に慣れていた町民が、他人に頼らず自助努力をするという気構えができると思います。町長がこれらを提唱しまして4年間が過ぎました。これからも実践していなければならぬと思っています。

それから、ご存じのように福岡県宮田町にトヨタという自動車メーカーが進出してきました、それと、既に進出している日産自動車が生産ラインの拡張ということで、その周辺の市町村の工場団地がほとんど売却されてしまいました。トヨタのような大きな企業が動きますと、その外郭企業が動くわけですが、そういう関係で川崎町も10万坪ぐらいの団地でしたがほとんど売れてしまいました。今まで、何十年間も売れずにペンペン草が生えていました団地が、脚光を浴び時代の表舞台に登場する時期を迎えまして、本当にホッとしたところがございます。これからも、工場団地はまだ足りませんので、工場団地を造って町発展のために、また男子雇用型の企業を沢山誘致したいということで頑張っていきたいと思っております。

以上、川崎町の紹介を終わらせていただきます。(拍手)

神崎治一郎(益田市長)

はい、ありがとうございます。

総社市長さん、恐れ入ります。

本行節夫(総社市長)

御紹介いただきました総社市長の本行でございます。

実は、昨年第1回の雪舟サミットを私のところで開催をさせていただきまして、関係の方に大勢の御参加をいただきました。御礼申し上げます。

資料の16ページに掲げておりますが、益田市さんとは少し面積が小さそうですが、192,34平方キロ、5万4,000人余り、ちょうど人口的には同じ程度の規模でございます。

立地条件等はそこに掲げておりますが、岡山県の県南にございまして、岡山市、倉敷市を底辺とする、その頂点、北部でございまして、ここに位置しておりますが、総社というのは御承知でございましょうけれども、備中の国、324社を合祀して総社というのができました。同時に国府が置かれ、国分尼寺、そして国分寺、こういうものが置かれたところがございます。

また、全国第9位という作山という古墳がございますが、そのほか大小合わせまして2,000基ぐらいの古墳がございます。同時に雪舟さんの生まれたところをございまして、貴重な文化遺産を守り、後世に育てていこうということで文化振興財団も設立をしたような

ことでございます。

私のところはかつて農業だけでございましたが、内陸工業地帯、あるいは住宅、観光、そういうふうな性格を持ってまいっております、今では全国大手のパンの会社、それから飲料水の会社、三菱自動車の下請工場、これらが主要でございます。ユニチカがございます。それから、新たな立地も予定されております。

そういうことで、農業なり、内陸的な工業、そしてベッドタウン。私はホームタウンという表現を使っておるんですが、そういうことに進めていこうと、こういうことでございます。

雪舟さんとかかわりは、そこへ書いておりますように、誕生したところでございます、今赤浜というところに誕生の地の石碑がございますが、実は圃場整備をしておりますんで、これの圃場整備のときに用地を拡張いたしまして、誕生地の整備を図っていきいたいなあ、こんなことを考えておるところでございます。

なお、先ほど言いました古墳等のほかに、鬼・き・ノ・の・城・じ・ニ・う・・・・「おにのしろ」と書きます朝鮮式の山城がございます、先般公有地化いたしました。約 120 ヘクタールございますが、非常にめずらしい山城でございますして、これは桃太郎の鬼退治の伝説、お話にかかわりを持って、こういうことでございますが、これらの整備もこれから進めていこうと、こう思っております。

今はそこへ、17 ページに書いてありますが、岡山県立大学、新たに県立大学を4年制の大学でございますが、これを平成5年の春の開学に向けまして用地が買収され、今造成工事が進んでおると、こういう状況でございます。

しかし、その事前の埋蔵文化財調査で先般も「馬養」と書いたかめが出てまいりまして、いろいろと製鉄の跡でありますとか、そういう文化財の保護と開発との調和を図っていくことが大変な仕事になっておるところでございます。

それから、文化筋通りの構想の実現でございますが、そこに書いておりますようなことで、晴れの場所にしていこうということで一定地域を指定いたしまして、その整備をしておること。

それから、北公園というのをやっております。これは南に1つ運動公園がございますが、狭うございますので、文化通りを挟みまして、その北側に8.2ヘクタールの公園をつくって、いこうと、そういうことをやっております。

ふるさと創生事業では、後に触れますけれども、「ふるさと創生仕掛人塾」。民間の方を10人が、その程度塾生として入っていただきまして、いろんなところを見学していただいたり、あるいは討議をしていただいたり、勉強していただきまして、町の活性化の原動力になっていただくということで、第1回生は終わりました。今年第2回生をやっております。

それから、「人材養成補助金交付事業」。これは学生の、あるいは市民の海外研修等がございます。今回、中学生が14名カナダへ、これはホームステイをするということで先般出

発いたしました。いろいろな勉強をしてくれるだろうと、こういうふうに思っております。

さらには、「花と緑のまちづくり」、あるいは「吉備のみちづくり」。この「吉備のみちづくり」というのは、歴史が非常にかかわりの多いところでもありますので、それらを結んでそれを通ることによって歴史が学べる、こういうことで計画しておりますが、どうやらこれは国の指定を受けそうな状況下でございます。

そのほかに観光センターの問題、あるいは駅前の再開発、それから区画整理事業等いずれにいたしましても人口の漸増地域でございますので、ましてや山陽自動車道のインターチェンジができましたし、あるいは新岡山空港にも 25 分程度で行けます。伯備線があり、吉備線があり、さらに井原線の延長工事もしておりますから、これから交通も便利になってまいります。横断道も整備されますから、そういうことからいたしますとまだまだこの都市基盤の整備を、しかも我々のところはいいいところであるぞと、雪舟さんを含めて「ええとこ総社」という、「燃える岡山、ええとこ総社」という合い言葉で頑張っておるところでございます。

皆さん方のまたいろいろのお話を聞かせていただきまして、それらを資といたしたい、このように思っております。

以上でございます。(拍手)

神崎治一郎(益田市長)

ありがとうございました。

それでは、山口市長さん、お願いします。

佐内正治(山口市長)

山口市長の佐内でございます。

昨年、総社市長さんの呼びかけで第 1 回の雪舟サミットが総社市で開催されまして、その節は大変お世話になりました。

また、第 2 回目は益田市さんのお引き受けということで、昨日から大変な御配慮をいただきまして、まことにありがとうございます。この場をおかりいたしまして厚く御礼申し上げます。

それでは、山口市の紹介を簡単に申し上げたいと思います。資料では 18 ページ、19 ページに掲げております。

山口市は御当地からは国道 9 号線、あるいは JR 山口線で約 2 時間ちょっとぐらいで結ばれておりまして、大変お互いに結びつきの濃い地域ではないかというふうに思っております。

山口市は山口県のほぼ中央に位置しておりまして、市域はちょっと大きく 356 平方キロメートルで、県下でも最も広い市で、また南北に細長い形となっております。

本市は昭和 4 年に市制を施行してまいりまして、一昨年に市制 60 周年を迎えて今日に至っております。

また現在、山口市におきましては、山口県はいわゆるへそのない県といわれておりまし

て、人口が 10 万人程度の市が瀬戸内海沿岸にばらばらと散在しているということから、へそがないと言われておりますが、最近の情勢から見ますとへそづくりが必要であるということから、中核都市づくりということの一つの柱に掲げて進めております。また、現在山口市の真ん中に位置しております小郡町との合併問題がこの春から急激に議論されるようになってきております。

本市の就業構造をみますと、約 7 割が第三次産業となっております。これは御案内のとおり湯田温泉があるとか、あるいは県庁、大学があるということによるものと思いますが、そのほとんどが北部市街地でございます。

これに対しまして、南部地域は第一次産業、中でも農業の集積が非常に高うございまして、県下有数の穀倉地帯となっております。

山口市の特徴を申し上げますと、県都でありますことから、県立の美術館、あるいは博物館、図書館などの文化施設や、国立山口大学、県立山口女子大学などの高等教育機関が集積しております。

こういったことから、これまで県下の政治、行政、教育文化などの中心的な役割を果たしてまいりましたし、また市内には雪舟ともかかわりがございまして大内文化、大内時代からの古い文化遺産がたくさん散在しております、その代表的なものがこの 19 ページに掲げております瑠璃光寺の国宝五重塔であろうと思っております。

しかし、山口市は現在、21 世紀を目指しまして、高度情報通信都市として大きく変貌をしようとしております。

具体的に申し上げますと、昭和 59 年に郵政省のテレトピア構想の第一次指定を受けまして、推進法人でございます山口ニューメディアセンター株式会社を第三セクター方式により昭和 61 年度に設立いたし、いわゆるキャプテン山口としてさまざまな地域情報を提供いたしております。現在、キャプテンの端末も約 2,730 台と普及してきておりまして、提供する情報の画面数も 8,850 にのぼっております。これに加えまして、昨年 12 月からコミュニティー型移動無線電話を新たにサービスに加えております。

また、流通関連産業の近代化、効率化によります地場産業の振興を図るために、昭和 61 年に通産省のニューメディア・コミュニティー構想応用発展地域の指定を受けており、山口地域流通 VAN のサービスを平成元年から開始しております。ちなみに申し上げますと、平成 2 年度末での加入は 185 社となっております。さらに、高度情報社会の中核的なメディアになるといわれておりますハイビジョンを活用したまちづくりを進めるために、郵政省のハイビジョンシティ構想の指定を平成元年に受けまして、その推進に努めているところでございます。

一方、このような情報システムの構築とともに、情報拠点の必要性から民話法の指定を受けますとともに、土地信託方式によりまして 10 階建てのインテリジェントビル「ニューメディアプラザ山口」を 28 億円かけて整備いたしております。

このほか、山口市には地震が少ないということ、台風が比較的通過進路となっていない

というようなこと、また市街地周辺地がしかも盆地であることから電波障害が少ないことなどによりまして、現在 KDD・・・国際電信電話株式会社、あるいは ITJ・・・日本国際通信株式会社、あるいは SCC・・・宇宙通信株式会社などのパラボラアンテナが林立しており、またことしの12月にオープンを目指して自治省が進めております地域衛星通信ネットワーク整備構想のセンター局の建設工事が現在進められております。市内あちこちパラボラアンテナがよきよきと林立しておるとい状況でございます。

また、山口市は御案内のとおり、二次産業のウェートが非常に弱いという面がございまして、現在二次産業の振興にも鋭意努力をいたしております。例の宇部テクノポリス圏域の一翼を担っております。山口市の南部には200ヘクタールを超えるテクノパークという工業団地を現在整備し、約半分を昨年より売り出しに入っており、いわゆるハイテク企業といわれるものの立地が今8社ばかり決まっております。今後さらにこの立地が進んでまいるといふふうに思っておりますが、これらが立地いたしますとかなり二次産業のウェートが高くなってまいります。

山口市の概況を取りとめもなくお話し申し上げましたけれども、やはり山口市はこの古い歴史と文化をはぐくみながら、さらにニューメディア、あるいはハイテク企業というふうなものとのバランスのとれたまちづくりについて今後鋭意努力してまいりたいと、かように考えておるところでございます。

簡単でございますが、紹介を終わらせていただきます。御清聴ありがとうございました。(拍手)

神崎治一郎(益田市長)

それでは最後に、益田市についてふれさせていただきます。

資料には20ページに掲げておりますが、昨日もちょっと申し上げましたが、遠来の方々には「百聞は一見にしかず」ということで、かなり市内をごらんいただきましたので何らかの御印象を得られたと思っておりますので、それらを踏まえながら簡単に申し上げてみよう、こう思います。

人口、その他、ここに書いてありますが、特に島根県の西部、山陰の地に属しておりますが、益田市が山陰の各都市と異なっておりますのは、自然環境におきましては極めて温暖な気候に恵まれていること。日照時間が大変長いということ、太陽熱カロリーが大変高いということ。そういうことを踏まえて対馬暖流のおかげで冬季積雪量も極めて少なく、およそ山陽型の気候であると、この辺がちょっと山陰の各都市と異なっていると、こういうことがいえようかと思えます。

それから2つ目は、歴史的には関ヶ原の戦いまで約400年間、益田市は城下町、先ほど益田兼堯侯の肖像画の話も出ましたが、約400年間にわたる城下町でございます。関ヶ原の戦いで西軍に属していたものですから敗れました。したがって、そこで廃城になり、益田侯は須佐の方に移されたということでございます。

したがって、関ヶ原の戦い以降は、廃城後は、いわゆる宗味市という市が立ちまして、



産業の町として発展をしてきて今年約 390 年と、こういうような形の町でございます。

したがって、将来の都市像についてはここに書いておりますが、益田の町というのは産業文化都市として伸ばしていこうと、こういうふうを考えております。といいますのは、特に益田市の周辺の町村、非常に人口過疎に悩んでおられるわけです。私どものところもそうでございますけれども、したがって、周辺町村の、いわゆる人口定住化のためには圏域の中核的な役割を果たし得る町にしていきたい。その場合には、いわゆる就業の場を確保すること、これが大変大切でございますので、産業の振興ということに力点を置くと同時に、本日のようなことを中心にしながら文化の町と、こういうことを考えていこうと、こう思っとるわけでありませう。

そこで、今先ほど川崎町の助役さんがおっしゃいましたが、3つの運動を展開されとるとおっしゃいました。私の方も3つの市民運動というのを提唱いたしております。

1つは、「さんらいず運動」。太陽の光のようにひとつ伸び伸びと力いっぱいやっていこうと、「さんらいず運動」。これは石見空港があと2年後、平成5年7月開港を目途に着々と事業を進めておりますが、そのためにはフライト産業をおこさないといかんと。しかも、フライトに加えまして、いわゆる広島とか、あるいは大阪とか、あるいは九州と、そういう市場への拡大を図っていかなければいかん、こういうことがあるもんですから、いわゆる農業、あるいは漁業、こういうような振興を図っていく。あるいは、新しい企業の導入を図るということで、近年2社ほど参りましたが、今聞き合わせの誘致企業も数社あるわけでございますが、そういうようなことで、若者が定着をする就業の場づくりを積極的に進めていきたいと、こういうようなことを踏まえて「さんらいず運動」、産業おこし運動になるわけです。それが一つ。

それから2つ目は、長寿社会でございますので、みずからの健康はみずからで守り、はぐくんでいくという必要があります。それで、健康保険予防、医療、リハビリとこういうようにつなぐことによって地域社会を健全にしたいということで「健康づくり運動」を進めております。

それから3つ目は、健康な体と同時に健全な心を培っていく必要があるわけでございます。そういうことで、「生涯学習まちづくり運動」。

この3つの市民運動を提唱いたしながら、皆さん方といろいろとその学習、健康まつり、こういうようなことを通じながら産業文化都市へ取り進めていくと、その辺が基本的なものでございます。

それからあとは、ここに書いておりますように石見空港を早く建設をするということ。それで、空港をいかに生かしていくかということ。この辺を力点に置いて取り組んでいきたい、かように思っております。

おくれております観光リゾートの問題も、山口の市長さんもおられますけれども、やはり山口市、あるいは萩市等周辺の県境を越えた市町村とも一体となって推進取り組みをしていきたいと、かように考えております。

もう一点は、今ふるさとおこし運動を精力的にやっております、15の集落がございます。15の集落ごとにふるさとおこし推進事業と、こういうことを取り進めております、今ソフトな事業でございますけれども、1年各地区100万円ずつ助成をしまして、3カ年継続することにしております。

例えば、二条という地区は螢の里づくりをしております。鎌手という地域は水仙の里づくりをやっている。こういうようにそれぞれの地域の特性を生かしたふるさとづくり運動を積極的に取り組んでいただいておりますが、そういうことで地域地域におきます特性を生かした集落形成を図っていこうと、かように思っております。

時間が来ましたので、以上でとどめておきます。また時間があれば補足をいたします。(拍手)

そういうようなことで、それぞれの今市長さん方、町長さんのお話を伺って、自分の地域、置かれている地域の中でどのようなまちづくりを大変お骨折りをお願いしておりますが、お話の中でよくわかっていただけたものと思っておりますが、時間がございませんので、また必要に応じて資料でも欲しいとおっしゃればそれぞれまた市長さんや町長さん方をお願いをして資料も送ってもらいますので、お許しをいただいて、次に進めます。

そこで、それぞれ異なったお話をしましたが、今からは共通した問題に入っていくということで、第1回の雪舟サミットを通じて以後どう取り組んできたのか、雪舟さんが自分のところではどういう作品、足跡を残しておられて、それをいかに生かしていこう、この辺が共通課題でございます。それぞれ地域ごとに雪舟さんのつながりがあるわけですが、それを今度は横断的につなげて輪を広げていく、こういうところへ話を持っていくことができれば大変幸せだなと、こう思っております。

それでは、大野町長さん、よろしく願いいたします。

三浦寛喜(大野町長)

それでは、今、司会者からお話のありましたように、共通する問題と申しますか内容につきまして申し述べさせていただきますが、その前にちょっと一言補足をさせていただきます。御案内のように先ほど申し上げました農道空港を起爆剤にいたしました農業、工業、そして商業、観光、教育という活性化を図ろうと取り組んでいますが、農村地帯に共通する悩みがございます。それは過疎化と高齢化であります。

私どもの町も若い者がだんだんと少なくなりまして、65歳以上が人口に占める割合は24.4%となりました。そこで、広い耕地をだれが守っていくかということになるわけでありまして。また、活力あるまちづくりということになりますと若い人たちが住みたくなるような大野町なら嫁さんに行ってもいいというような農業後継者が育つように、そういう町にしなければならぬ課題があるわけがございます。

したがって、魅力あるまちづくりということで過疎化に歯どめをかけるための過疎からの脱却、観光開発及び交通体系の整備ということに今拍車をかけておりますが、なかなか思うようにいきません。しかし、働く場としての企業誘致を大阪のサンダイヤ株式会

社さんをお願いをして、県を通じて誘致していただきましたが、従業員は 100 名の採用に對しまして現在 59 人であります。開業して半年以上になりますが、まだ定員に足りないという悩みがあるわけでございます。

したがって、私が思いますのには、このふるさとの活性化、いわゆるまちづくりは、その基本になるものはやっぱり人づくりであり、教育であり、人材育成であろうかと、このように考えておりました。学校教育は本当に百年の計の教育投資でありますけども、やはりこれを大事にしながら、現場の教育効果が上がるような条件整備に力を入れなければなりません。そしてまた、公民館が地域、地区の皆さんのこのふるさと活性化への大きな拠点になるものでありますことから、モデル公民館指定を 15 館ずつ去年からいたして取り組んでいるわけでございます。

一方、またそれぞれの職業、それぞれの年代層に応じた皆さんの研修の場、体験の場というものを設定いたしまして、「大野塾」と「ぼたん桜 2000 年会」というようなものを組織いたしまして、大体 1 人 25 万円から 30 万円の予算で日本全国どこでもひとつ自分の好きなどころ、すばらしいなと思うようなところがあればいろんなところで指導を受け、あるいは資料を見てひとつ研修に行っていたきたいということで、担当の課を通じてそれぞれ皆さんが研修をしていただいているわけでありまして、まさに体験学習をしていただいているものです。

さらにまた、国際社会の時代になり、国際市場に勝つためにはやはり国際交流が必要ですので、国外にも研修に行っていたらこうと、ことしはもう既に 4 名の職員が研修に行き、一般からは 2 名行くようになってはいますが、そういう機会も提供しているわけでありまして。

一方、大野町は、県立図書館、あるいは文化会館、芸術会館からかなり遠いところにありますので、町民の皆さんがなかなか県立といっても行くような機会がありません。町に博物館とか、文化会館をつくれればいいんですけど、予算がありませんので、文化バスを購入いたしまして、そういったいいすばらしい催しがあるときにはそれに乗って研修していただくことと計画しています。こういうことを今考えて、人づくりに力を入れているわけでございます。

さて、大野町内には 5 校の小学校がありますが、本日 6 年生が 40 名ほど子供フォーラムにお邪魔いたし、いろいろ勉強させて御指導いただくわけでございますが、その交流の絵も先ほど展示されておりましたが、少しでも小さいときからこうした場に参加させていただきながら、視野を広め、交流を深めていくことが大事じゃないかと考えております。

それからいま一つ、8 月 4 日からだったと思いますが、大野町では国際交流でホームステイとして大学生をお迎えいたしまして、それぞれの民家に泊めていただき交流を深めようという計画を去年から始め、ことし 2 国から 13 名入っていただけるようになってはいます。

さて、この 1 回の雪舟サミットの後におきましては、私どもといたしましては先ほど金澤先生からお話ございましたように、沈墮の滝を雪舟さんが 1475、6 年のころ描かれましたが、残念ながら焼失してしまったというような悲しい出来事がございます。しかし、

幸いにその模写がございましたのでそれをもとにして、私共は京都国立博物館の館長さんの許可をいただきまして、ことし沈墮の滝付近の道端に縦3メートル、横4メートルの大きな模写の看板を、この資料にもありますが、こういうものを掲げさせていただいているわけでございます。

もちろん、この地域の方による沈墮の滝の観光開発推進協議会という組織がありまして、それぞれ草花や桜などを植え、周辺の清掃管理もしていただいておりますが、特に町におきまして去年から今年にかけて208メートルの遊歩道をつくり、その滝の周辺の整備をいたしているところであります。同時にまた高齢化社会になりまして、健やかで心身ともに健康な、物も心も豊かなまちづくりということを中心に置いておりますので、少しでも長生きをしていただくということで、農道空港周辺には、総合運動公園をつくっていませんが、この沈墮の滝にはふれあいのためのゲートボール場等もつくり、芝を植えて、そこで心のふれあい、あるいは、そういったスポーツ等も楽しんでいただけるゲートボール場も建設しているところでございます。

さらに、駐車場、それからつり橋等も将来そこにつくり、つり橋を渡りながらその雄大なかつ壮大な滝をごらんいただけるような環境整備を考えていこうと、こういうふうを考えているわけでございます。もちろん、展望台というものもこれからつくっていくように計画をいたしているわけでありまして。

大野町花がぼたん桜でありますので、ぼたん桜の植樹もその付近にしているわけですし、推進協議会の皆さんも期待を込めながらシーズンになりますとワイヤーを横に張りまして、コイの滝上りを表現するかのよう、こいのぼりをたくさん上げていただいております。地域を挙げてそうしたひとつの地域文化のまちづくりに取り組んでいます。

ところが、この「沈墮の滝」は、大野川の水利権が九州電力株式会社、九電にあります。もちろん九電の土地も周辺にありますし、元発電所の石造建築物も九電の私有地になっております。したがって九電さんの協力がなければ、地域の皆さんが喜んでいただけるような環境整備ができません。いろんな文化専門員等の皆さん方も訪れましておっしゃるには、「何とかこれを生かしたい」ということです。全町民が雪舟さんが書いたこの「沈墮の滝」の将来に、非常に期待をかけているのは否めない事実であります。したがって、地元といたしましては、九電の方と相談をしながら、青写真ができれば九電の方も可能な限り御協力を申し上げますというお話もいただいておりますので、私どもは、今後、九電さん等にあの珍しい、九州じゃ恐らく一番古いといわれております石造建築物、まずこれを利用したミニ発電所なるものをつくっていただき、研修にもなるし、見学になるし、また観光地にもなるような方法で、会社の方にもお願いしていこうと考えているわけでありまして、できますならば次回等つきましてもそうした企業の、一般企業の方々もこれに参加していただくような努力を地元として致したいと、このように考えているわけでございます。

以上でございます。

神崎治一郎（益田市長）

はい、ありがとうございました。

川崎町長さん、お願いします。

福永一雄（川崎町助役）

さきほど、町長のピンチヒッターで出ましたので、自己紹介を忘れたんじゃないかと思っておりますので、失礼しました。川崎町助役の福永でございます。どうぞよろしくお願い致します。

昨年、益田市に参りまして雪舟の庭を拝見致しました。経済部長さんのお話では「今年で2回目のサミットを催すので、参加してくれないか」ということだったので、私もこれはいいことだと思ひまして、町長に報告し、本年、厚かましく参加させていただきました。真にありがとうございました。

川崎町には、藤江さんが所有する魚樂園という庭がございます。これは、1476年頃に築庭されたということですが、500年間、藤江氏が個人で現在まで管理されておりまして、大変ご苦労なさっていると聞きます。この雪舟の庭を、個人で、これからも管理されることは大変だということと、藤江さんのところが火事に遭い、雪舟に関する資料が焼失され、庭だけが残りまして、これだけは、大切に保存しなければならないということになりまして、今後は、町民の財産として、これを大切に保存していきたいという願いがありますので、川崎町がこれを買ひ上げまして管理、保存をする計画でございます。

また、さきほど益田市長さんがいわれましたように、「百聞は一見にしかず」ということで、川崎町の雪舟の庭をごらんになっていただければ幸いに存じます。

町としましては、今まで文化財を疎んじていたのじゃないですけど、文化財は、大切に扱わなければならないという、町民意識を促すために、昨年、文化財保護条例を設置しました。そういうことで、この雪舟の庭を、みんなで守っていこうという機運が盛り上がっています。

昨日、町長が申し上げたと思いますが、川崎町の北部は工業で繁栄を、南部は山紫水明に囲まれておりますので、その自然を利用し、また、名所旧跡が沢山ございますから、それらの物を有機的につなぎ合わせて観光開発を推進していこうという計画でございます。昨日、20億円という大きな金額を出しましたが、これも、やはり魚樂園の庭と、それから川崎町が企業誘致致しました英彦山湯～遊～共和国というクアハウスがあります。これには13の風呂がありまして、250人収容できる宿泊施設もございまして、風呂はラドンとか、ラジウム鉱泉を利用した身体に効く温泉でございます。昨年の7月にオープン致しまして、今年で1年になります。年間20万人程度の利用を来年度は30万人を目標に頑張っております。また、雪舟の庭にも、年間5万人の観光客が来ます。雪舟の庭に前側にフェザントカントリークラブというゴルフ場がございまして、ここにも年間6万人のお客の利用があります。こういう集客を利用しまして、観光開発を推進したいということで、町営のリング園等の建設を沢山計画しておりますし、一部は完成して運営をしております。それと、

雪舟に親しくふれあっていただきたいということで、英彦山湯～遊～共和国から雪舟の庭に向けて、1.5キロぐらいの距離がございますが、遊歩道を造る計画もございます。

川崎町の雪舟の庭を愛する以上は、この機会を期に、サミットに参加されております、市、町長さんのところにお伺いをして、共に、勉強したいと思っていますので、ご協力、ご指導承りたくお願い申し上げます。

以上で終わります。(拍手)

神崎治一郎(益田市長)

はい、ありがとうございます。

総社の市長さん、お願いいたします。

本行節夫(総社市長)

第1回の雪舟サミット交流会議で申し合わせをいたしまして、その後総社市の雪舟を核にしたまちづくりをどう進めてきたかということをお願い申し上げます。

先ほどこの資料で申し上げましたのですが、市の目標はそこに書いてありますように「古代と21世紀を結ぶ風格ある文化創造都市」、こういうことございまして、これを実現するための一つでもあったということで、第1回の雪舟サミットをやらせていただきました。

これに先立ちまして、一昨年に雪舟が辿りました足跡と作品を紹介いたします「雪舟足跡展」、あるいは「雪舟講演会」等を開催いたしました。

そして、サミットを契機にいたしまして、まず益田市さんから子ども会の人、約100人が総社にお見えになりました。雪舟が少年時代に修行した宝福寺へ1泊していただきまして、総社市との子どもの交流を深めました。

また5月には、そのお返しというふうな意味を込めまして総社市の子どもが180人程度益田市を訪問させていただきまして、旧交と申しますか、さらに交流を深めていったと、こういうふうになっております。

それから、この8月でございますが、民間団体であります総社市の文化振興財団、先にちょっとふれましたけれども、雪舟足跡めぐりツアー、これを山口市さん、益田市さんに御連絡を申し上げまして計画をいたし、40人の定員で募集いたしましたところ、約1時間でもう満席になってしまいました。そういう好評で、関心の高さがうかがわれるわけですが、このツアーはさらに大野町さん、川崎町さんなどのゆかりの地へも将来的には足を伸ばしていきたい、こんなふうに思っております。

もう一つ、雪舟さんへの関心が高まってまいりましたんですが、ライオンズクラブが今1つございましたが、これをもう1団体結成をされることになりました。この団体名に「総社雪舟ライオンズ」、こういう命名がなされました。

また、この8月3日に総社市民祭り、いわゆる総踊りと、翌日に花火大会がございますが、これにはTシャツを着用する。全部これはネズミの絵が胸に掲げられまして、雪舟をしのび、誇りに思っていていこうと、こういうことがございます。

それから、小・中学校の郷土学習に雪舟が必ず取り上げられるようになりまして、今ま

で先ほど言いましたように雪舟誕生の地はありますものの、そんなに訪ねる方が多くなかったのでありますが、サミット以来、雪舟誕生地にも多くの方が訪れるようになってまいりました。

また、ことしの5月には郷土学習用の副読本の第2巻といたしまして、最初第1巻は「総社市の歴史と文化財」、教育委員会の先生方が骨を折ってやってくださったのですが、今度は第2巻で「誇りに思う人々」ということを発刊いたしました。これにはその巻頭に雪舟さんが載っているわけでありまして、各市町へお送りしたと思っております。

このように、次第に市民の皆さん方に雪舟さんに対する認識、誇り、そういうものが深まってまいっておりますけれども、やはり最初のごあいさつで申し上げましたように雪舟さんというふうな親しみを持って、あるいは尊敬を含めてそういう呼び方ができるというのはかなり長い時間を要するだろうと、こう思っております。これからもひとつ息長く続けていきたいと、このように思います。

このほかに、先ほど申しましたけれども、雪舟さんとは直接は離れるのですが、平成5年の春に岡山県立大学が開学されます。これによりまして大学を核にしたまちづくり、こういうことでいろいろと努力をしていこうというふうに思っております。

また、瀬戸大橋ができて3カ年が経過いたしました。観光客がちょっと伸び悩みのようでございます。やはり観光にも我々は力を入れなきゃなんということでございますが、岡山県下に1つしかない国分寺の五重塔が老朽化いたしました。今解体修理中でございます。これまた平成5年ぐらいまでは解体修理がかかりますので、これができる時点あたりがひとつの目標だということで、観光センターの計画も持っているわけでありまして、いろいろと問題がございます。これから努力を要する、そういうことでございます。

それから、そのほかには先ほどもふれましたけれども岡山総社インターが今年の3月に開通いたしました。今福山西まで来ておりますが、総社からは30分ぐらいで福山西まで来ます。そうしますと、これからこちらに延びること、さらに東へ延びること、中国横断自動車道が延びてきて、瀬戸大橋と四国の高速道もふえることによりましてちょうど東西と南北の交通の交点になる、それが私ども総社市の一番東の端でございますので、これらにつられまして企業誘致や、あるいは農業の振興、圃場整備、河川の改修、まだまだたくさんありますけれどもみんなで力を合わせて頑張っていこうと、こういうふうに思っております。

「仕掛人塾」につきましては先ほど申し上げたとおりでございますが、人づくりが大事だということで、生涯学習にも力を入れていくということで、指定を受けまして、いろいろと取り組んでいるとこういうのが実情でございます。

今までの取り組みにつきまして御報告申し上げます。

神崎治一郎（益田市長）

はい、ありがとうございました。（拍手）

それでは、山口市長さん、お願いします。

佐内正治（山口市長）

それでは、先ほど山口市の紹介を申し上げましたが、ここでは山口市と雪舟のかかわりについてまず御説明をいたしたいと思っております。

御案内のとおり山口は、今からおよそ 630 年前に周防、長門の守護職でございました大内氏の第 24 代当主の大内弘世によって開かれた町でございます。弘世は京の都を模したまちづくりを行っておりまして、以後西の京として大いに栄え、にぎわった町でございます。御案内のとおり、大内義隆が自刃を長門の大寧寺でするまで約 200 年間、31 代の義隆まで、24 代から 31 代まで、約 200 年間でございますが、この間非常に栄えたわけでございます。

このような中で、雪舟が山口に参りましたのが 1460 年のころ、これは 28 代の大内教弘のころでございますが、雪舟 40 歳のころといわれております。そして「雲谷庵」というアトリエを構えまして、創作活動に打ち込んだのでございます。

その後、大内氏が派遣をいたします遣明船で中国大陸に渡り修業を行いまして、帰国後もまず「雲谷庵」に腰を落ちつけております。

山口の町には合計で約 40 年の間とどまっております、国宝「四季山水図」などもここで描くなど、山口は雪舟の人生の約半分を過ごした町でございます。

また、亡くなったところも御当地益田という説もございますけれども、1506 年に山口の「雲谷庵」で亡くなったともいわれております。

雪舟にかかわりのある有名な施設といたしましては、市街地の郊外の宮野というところに臨済宗東福寺派の専門道場の常栄寺というお寺がございます。この常栄寺の庭園は大内氏第 29 代当主政弘の命により築庭されたものといわれておりまして、雪舟の描く山水画の世界を感じさせてくれます。現在でも雪舟庭として親しまれ、国の史跡名所にも指定されておりまして、観光客も多数訪れ、山口市の観光名所の一つにもなっております。

このほか、雪舟とかかわりのあるところとしては、雪舟のアトリエであり、多くの傑作を生み出した「雲谷庵」跡がございまして、市の指定史跡となっております。現在ここには明治時代に建てられた庵が残っております。

このように栄華をきわめた大内氏時代の中で、雪舟とのかかわりは極めて深いものがございまして、大内文化の中心の一つとも言えます。また、大きく花開いた大内文化は、その余薫を現在にも漂わせてくれております。その代表であるのが、先ほどもちょっと申し上げましたが国宝瑠璃光寺の五重塔で、大内氏が隆盛を誇っていたころの最大の文化建造物でございます。その他、国の重要文化財の洞春寺山門や、古熊神社、今八幡宮、大内氏遺跡館跡など数多くの文化財が残っております。大内氏の館跡につきましては、現在保存整備に努めまして、将来的には館の復元を図りたいと考えているところでございます。

また、雪舟をはじめ、連歌師の宗祇、そしてスペインの宣教師フランシスコ・サビエルなどが山口の町を訪れております。市街地の中心の小高いところに建つサビエル記念聖堂というのが市役所の真裏にございますが、これはサビエルが山口に来て 400 年を記念して建設されたものでございます。



大内文化は多くの文化遺産をとどめておりまして、周辺の自然環境とも融和した自然と文化の彩りのあるまちを創出してくれております。

こういったことで、先ほど来、昨年の雪舟サミットの後に具体的にこのサミットに関連してどういう事業を組んだかということでございますが、実は山口としては特別雪舟としてのものは取り組んではおりません。今後やはり取り組むべきであろうというふうに思っておりますが、現在私どもは先ほど申し上げました 200 年に及ぶ大内文化を支えてくれた人々、先ほど申し上げましたが画聖雪舟であるとか、あるいは連歌師の宗祇であるとか、あるいはフランシスコ・サビエルであるとか、たくさんのそういったこの時代を支えた文化人がいるわけでございますが、ですから雪舟も大事でございますが、そういったほかの人もやはりこの大内文化を支えた人々としての顕彰も考えておりまして、例えば来年でございますが御案内のとおりスペインのバルセロナでオリンピックが行われますが、この関連もございまして、ことしの秋にはサビエルサミットも計画をいたしております。

そういったもろもろの残された遺産を顕彰する行事の計画をいたしているところでございます。さらには御案内のとおり山口は箏曲の発祥の地でもございます。そういったものの顕彰もございまして、いろいろの文化財がたくさんあるために、やや手を広げ過ぎているかもしれませんが、何もかもやらなきゃならないというふうな面もございまして、なかなか全部に手が回りませんが、先ほど来申し上げておりますように、やはり文化遺産を非常に大事にし、顕彰すると同時に、すぐれた芸術文化に市民がふれる機会を今後どんどんふやしてまいりたいと思っております。この春、大英博物館展を山口で行いましたが、26 万人を超える人が山口にいらしていただきました。さらには、今新しい文化を創造する館の建築を進めておりまして、市民の皆さんがここへ来て大いに語り、みずから文化を創造するエネルギーをここで培っていただけるというふうな場をつくることにいたしております。ですから、私は伝統文化を大事にする。あるいはすぐれた文化にふれる機会をつくる。さらには、市民の皆さんが新しい文化を創造していただく、この三つが一体になってこそ本当の文化都市と言えるのではなからうかというふうに思っておりますが、この三つが一体となった振興を図るために去年から芸術文化振興基金の設立もいたしまして、市民と市が一緒になってこの基金の積み立てをするということも進めているところでございます。

昨年の雪舟サミット以来の具体的な取り組みという問題については、特にここで自慢をするほどの実績を持っておりませんが、そういったことで文化遺産の顕彰という面で、あるいは文化遺産の保存、整備という面で、この問題に取り組んでまいりたいと、かように考えているところでございます。

以上でございます。(拍手)

神崎治一郎(益田市長)

ありがとうございました。

それでは、益田市の関係について一言ふれさせていただきますが、第 1 回以降の具体的な動きといたしましては、先ほど総社の市長さんがおっしゃいましたけれども、本年 3 月

に益田子ども連絡協議会の子どもさんが総社の子ども会を訪問いたしました。それぞれ宝福寺、その他を見学しながら交流を深めました。そして、5月のちょうど連休のときに総社のお子さんが益田へ来られました。重ねて交流を深めることができた、大変にいずれも盛会に終始したと、こう思っております。そういうような交流をしたこと。

それからもう一つは、昨年1回目のサミットの際には中国の寧波市とのお話をいたしたわけですが、その第1回以降寧波市農業視察団とのお話で中国の寧波から農業研修生を益田に受け入れようと、こういう話になった。それはいわゆる雪舟さんが天童寺で修業をされたわけでごさいます、その雪舟さんのゆかりで益田と寧波市とが今交流を続けている最中のごさいます。そういうことで、農業研修生を受け入れすることができたというのも雪舟さんの御縁のごさいます。

大変まじめな農業青年3人を5月9日に受け入れました。それから、6カ月間、11月8日まで研修をしてもらうということで、3戸の農家にそれぞれ1人ずつ寄宿されておまして、農家の方と一緒に毎日農業に汗を流していただいている。非常にいい勉強になってお帰りになるんじゃないかと思えます。

そういうことで、このサミットをやるので若い中国の寧波市の農業研修生を皆さんにぜひ御紹介をしたいと思っておりますので、ちょっと一言紹介を。

紹介されたら、ちょっと起立してあいさつをして下さい。

司会

恐れ入ります。御起立をお願いできますでしょうか。

谷夏先さん。益田市大草町の松永さん宅で牧畜を研修専攻されておられます。(拍手)

陳志泗さん。中吉田町大庭さん宅で水稻を研修専攻されておられます。(拍手)

陳国さん。益田市安富町の田原さん宅で水稻を研修専攻されておられます。(拍手)

ありがとうございました。どうぞお座りくださいませ。

神崎治一郎(益田市長)

どうぞおかけください。

今紹介した陳志泗さん、陳国さん、それから谷夏先さん、3人です。もう日本語も大変達者になりました。だから、言いかえると国内でこういう交流、一方ではまた国際的に雪舟のゆかりで皆さん方一緒に交流できればというような感もいたしたものですから御紹介をいたしました。

その後、益田の地におきまして雪舟さんのことにつきましては、「雪舟顕彰会」というのをつくっているわけですが、これは55年に第3次の「雪舟顕彰会」というものをつくりました。第1次は大正15年、第2次が昭和25年とそれぞれつくったわけですが、かなり事業をしていただいた後自然消滅ということになりましたので、昭和55年に雪舟さんが亡くなって475回忌、これを契機にして第3次の顕彰会を発足いたしました。自来、顕彰会の方では絵の好きな子どもの絵画展、あるいは雪舟講座等々を大変精力的に取り組んで、行政も民間も一緒になって雪舟顕彰、遺徳をしのぼうと、こういうことです。昨日おせんべ

いを皆さん方に1つずつ渡されましたが、それはあそこの大喜庵の自治会の皆さんで雪舟等楊の「等楊」という諱にあやかって「等楊会」と、こういうのをつくられました。せっかく雪舟の郷記念館ができたんだから、自分たちの住む自治会の中にあるからお手伝いをしようじゃないかということで、ボランティア活動で昨日も出ていただいております。そういうように大変「雪舟顕彰会」なり、「等楊会」、こういうことで活動をいただいているところでございます。

また、昨日差し上げましたがこの「益田」というパンフレット、あるいは雪舟という本もあるんですけども、こういうことによって山口の市長さんがおっしゃったようにいろいろと数多い方々がおられるもんだから、そういうような方々の観光、あるいは文化財の紹介と、幅広く使っております。観光のパンフレットは一々あるとお持ち帰りになってすぐどこかになくなっちゃうんですね、リーフレットみたいなものは。そういうこともないものですから、せっかくなら車の中でお読みいただいたらということでこういう冊子にいたしました。この中に雪舟さんのこともたくさん書いてございますので、中身を言うと時間がかかりますからお帰りの車、車の中でゆっくり読んでいただければと、こう思っております。

いずれにいたしましても、ともどもにせっかくの雪舟さん、世界に誇る雪舟さんでございますので、それぞれの市で頑張っていきたいと、こう思っております。

益田市の紹介はその程度にしておきます。(拍手)

今お聞きのように、それぞれ本当に真摯にお取り組みをいただいているわけでございます。やはりこれは一時的なことじゃなくして、地道な活動、運動の中で、あるいは市町村の事業の取り組みの中で着実に進めていくと、こういうことが私は大変大切だろうと思っています。線香花火にならないような運動推進を今から引き続いてどのような取り組みをしたらいいのかという点について、これは順序を申し上げていくともう時間もございませんので、フリーに御発言していただきたいと思いますが、今年の第1回の雪舟サミットにおいて結構幅広くこういうことを進めようじゃないかということをお話合ったわけでございます。

その1つは、小・中学校における郷土学習、いわば副読本みたいな形の中で雪舟文化と申しますか、雪舟さんのことを取り組んではどうだろうか。

2番目には、児童・生徒の修学旅行の場合には、やはりこういう関連のあるそういうところをひとつ修学旅行先に選定をしていくように取り組んではどうか。

さらには、それぞれの持つ文化作品などを交流、交換をしてはどうか。

それから、各自治体の住民の皆さん方にツアーを組んでもらってそうしてそういうことを、いわば史跡めぐりといいますが、そういうことを考えていくようにしてはどうか。

それから、それぞれが持つ郷土芸能、物産などの交流をしてはどうかと、こういうことを今年の総社のサミットにおいて取り決めといいますが、これからそういう方向で取り組んでいきたいと思います。

大体幅広く取り組んでおりますので、このことは一挙に片づくわけじゃございませんから、引き続いてこういう取り組みはしていこうと、こういうことにしなければいかんだろうと思いますが、それ以外になんかこういうことをひとつさらに考えようじゃないかと、そういう点がございましたらその辺を中心にしながらお考えのことについての御発言をいただきたい、こう思います。どなたからでも結構でございます。

はい、どうぞ。

本行節夫（総社市長）

私は中国との交流の問題にちょっと触れてみたいのですが。

実は鎮江市に金山寺というお寺がございます。ここに雪舟がお行きになりまして、幾ばくかの間、そこへおられたということでございますが、今日出席させていただいております私どものメンバーの中にもそこへ行っていただいた人がございます。

それから、亡くなられましたけれども日中経済協会の岡崎嘉平太先生、この先生も金山寺へ行かれまして、ここには雪舟さんの絵があるはずだが、何かカラー写真でも撮っていただけないかということをお願いしておられましたら、画と称する「揚子江心金山游龍禅寺之図」というのを岡崎先生を經由しまして私どものところにちょうだいいたしました。

それやこれやで、60年4月15日には高德正という鎮江市の市長さんほか4名、合わせて5名の方が来総されました。

それから、61年10月4日にも「チンチュウレン(陳忠廉)」とお読みするんでしょうか、中国人民対外友好協会鎮江市分会の副会長さんほか3名、合わせて4名。

また、ことしの平成3年3月4日には曹松さんとおっしゃる中国国際旅行社の鎮江支社長、こういう方がお見えになりました。

もちろん、総社市の日中友好協会での交流がございましたが、先方の方はひとつ友好都市を結んでほしいと、こういうことでございます。こちらへ参りますというと益田市さんは、寧波市とのかわりが非常に深くなっておられるようでありますし、北京の礼部院で壁画を書いたと記録にあります。57年に行きましたけどもこれはもう全然ございません。今、歴史博物館になっておりますが、こちらへ中国の方がおいでになりましても、単独に私どもだけの視野でなくて、こういうサミットに加盟をしているところ、この輪でもって向こうとの交流をするようなことを考えてはどうであろうかと、こんなことを実は思っているわけでございます。

したがって、単独に向こう様との交流でなくて、サミットに加盟している・・・これはもう参加は自由といたしましても、そういう輪をつくって向こうの都市との交流、あるいは友好都市、そういうことを結ぶことはいかがであろうかなあと、こんなことを考えておりますので、即刻の返事は、線は出んと思えますけれども、何か考えてみてはどうかなあと、こんなことを思っております。

神崎治一郎（益田市市長）

はい、ありがとうございます。

今のことについて何か皆さん御意見とか御感想がございますか。

はい、どうぞ。

佐内正治（山口市長）

今おっしゃるようなのも一つの意義があると思います。ただ、私どもは現在中国は済南市と友好協定を結んでおりまして、実は5年たちまして、去年5周年で私は済南に行って植樹をしてきたんです。桜の木を100本植えてきたわけでございますが、お互いしょっちゅう行ったり来たりしておりますし、また先ほど申しましたサビエルとの関連でパンブローナ市との友好協定、姉妹都市を結んでおりまして、これも11周年になりまして、ことしの秋はパンブローナ市に行くことにしております。まだそれと韓国との交流についても考えております。

したがって、別にこれだけたくさんあるのだからもうほかはやりませんよという意味じゃございませんが、これからますますこういった輪が広がってくると思うんです。

ですから、雪舟とのかかわりでの友好都市をこれは個々が結ぶんじゃなくて、サミットとして結ぶというのは一つの意義があるかというような気もいたしております。ですから、個々がやるんじゃなくて、ここに御出席の皆様方と御一緒に向こうのひとつの友好都市縁組ですか、そういったものもひとつおもしろいんじゃないかというような気がいたします。

神崎治一郎（益田市長）

はい。

ほかに何かございますか。

国内的な交流でこんなことをやったらどうかというのがございましたら、あわせて御発言いただきたいと思います。

三浦寛喜（大野町長）

今のことなんですけども、これは本当にいいことだと思います。それで、今お話がありましたように、事務局段階で関係の機関とかと十分具体的に計画をしていただいております。申し上げたいと思います。

それから、このように会議を重ねてまいりますと、関係する市や町等、身近に感じて大変ありがたく思っているわけでございますが、できましたならば毎月各市や町の広報、これが発行されていると思うのでありますが、そういうものをそのたびにお互い交換させていただいたらどうだろうか、このように考えているわけでございます。

神崎治一郎（益田市長）

はい、いいですね。

ほかに何か。

それでは、大体時間になりますので、1回目の一緒に話し合ったこと、これはひとつまだ全部出来上がっているわけじゃないし、継続したいと思いますので、これは一層推進をしていこうということをひとつお互いが確認をしようと、こう思います、それはいいで

すね。

〔「はい、結構です」と呼ぶ者あり〕

それから2番目の、それぞれ広報紙とか、あるいはまた観光用の資料とか、あるいは文化財の資料とか、特にそういうもの、私どものこのサミットの目的に沿うような資料は刊行したら、それぞれの市町へお送りをするということにしましょう。広報紙は毎月になるわけですから。それじゃ、そういうことをまず2つ目の取り決めにさせていただくということにいたしたいと思います。

それから3つ目は、やはり雪舟さんの鎮江市、あるいは寧波市、金山寺なり、あるいは天童寺と、大変ゆかりの深いことでございますんで、せっかくきょうはちょうど雪舟文化交流都市の盟約、言いかえますと3市2町の姉妹都市提携と、こういうことにもなるわけでございますので、このサミットの全体の名において、単独じゃなくしていろいろ事務的に今総社の市長さんがおっしゃった方向に向かって少し勉強もしながら何とか時間はかかっても努力をしていくということにしてはいかがかと思いますが、ようございますか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

それじゃ、以上3点、一応きょうのこのサミットの取り決めということで、今後とも構成市町ともどもに雪舟文化の高揚を通じながら、お互いの地域発展のために連携を深めながら新しい時代に取り組んでいきたいと思います。どうぞ、そういうことでともどもよろしくお願い申し上げます。

司会

皆様、いかがでしたでしょうか。雪舟を通じた交流、まちづくりについてのお話が進んだわけですが、今後さらに各自治体の交流、友好が深まるようにゆかりの市長様、町長様に拍手をお願いいたします。(拍手)

どうもありがとうございました。

それでは、サミットに参加の市や町が雪舟文化を中心としながら、各分野におきましてさらに交流事業を展開し、友好と連帯が深まりますよう、ここでサミット宣言に移りたいと思います。

神崎市長様、よろしく願いいたします。

神崎治一郎(益田市長)

それでは、今回の雪舟サミットもいよいよ終わりになりましたので、一応私どもその構成団体で雪舟サミット宣言をいたしたいと、こう思っております。私が朗読をさせていただきます。

禅の世界に身を置き、水墨に新しい世界を創造し、「造化にしたがいて四時を友とする旅」に明け暮れた画聖雪舟等楊。

その雪舟の縁で、ここ益田の地にゆかりの自治体が相集い第2回雪舟サミットを開催し、雪舟の遺徳を顕彰しつつ、それぞれの地域のまちづくりの情報を交換するとともに今後各分野の交流事業を展開して相互理解を図り、友好と連帯を深めることは地域文化の向上と

関係市町相互の健全な発展に貢献するものであることを確信する。

よって、ここに相互市町間の雪舟文化交流都市盟約を締結することを宣言する。

平成3年7月27日。第2回雪舟サミット参加自治体交流会議。

以上でございます。(拍手)

どうぞよろしく。

司会

ただいまサミット宣言が拍手をもって採択されましたが、会場の皆様、もう一度拍手をお願いいたします。(拍手)

続きまして、サミット宣言文の中にありましたように、ここで雪舟文化交流都市盟約の締結式を行いたいと思います。

開催地であります地元益田市長様から要旨の説明と盟約書の朗読をお願いいたします。

神崎治一郎(益田市長)

要旨の説明ということは改めて申し上げるまでもなく、先ほどの交流会議の中でも出ておりますけれども、せっかく2回目のサミットに相なったわけございまして、1回、2回を通じながらこの3市2町、お互いの交流都市としての盟約をしたらどうかと、ちょっと私先ほどふれましたが、いわば姉妹都市だと。通常姉妹都市という場合は、1対1のよくなときによく使っておりますが、お互い雪舟文化を中心とした交流都市と、こういうことでお互いの絆を一層深めていきたいと、そういう意味で盟約を締結したい、こういうことで、それぞれ市長さん、町長さん方の総意の中で大体御了解をいただいて、この雪舟文化交流都市盟約書に署名をしようと、そうして交換をするということにさせていただいております。

それでは、この盟約書の方をちょっと、せっかくたくさんいらっしゃいますので朗読をいたします。

雪舟文化交流都市盟約書。

第2回雪舟サミット宣言により、雪舟ゆかりの大野町、川崎町、総社市、山口市、益田市は、ここに雪舟文化交流都市盟約を締結する。

今後は、雪舟文化を初めとして各分野の交流事業を展開して、関係市町相互の友好を深め、健全な地域発展に努力することを確認する。

よって、ここに盟約書に署名をする。

平成3年7月21日。

以下、大野町長、川崎町長、総社市長、山口市長、益田市長、以上が署名をいたします。

司会

それでは、市長様、町長様、署名をお願いいたします。

お書きになられましたら、どうぞお隣へお回しくくださいませ。

ありがとうございました。

それでは、ここで雪舟文化を初めとした都市間の交流がますます深まりますよう、市長

様、町長様に握手をしていただきたいと思います。

恐れ入りますが、市長様、町長様、舞台の中央までお願いいたします。

どうぞ皆様、盛大な拍手をお願いいたします。(拍手)

司会

どうもとの席にお戻りくださいませ。お席の方へお願いいたします。(拍手)

続きまして、来年度はお隣の山口市で第3回の雪舟サミットが開催されるお約束ができましたので、ここで山口市長佐内正治様、一言ごあいさつをお願いいたします。(拍手)

佐内正治(山口市長)

御当地におきます第2回の雪舟サミットが非常に盛会のうちに、また有意義な中にこのように終わろうとしております。これから、また次のフォーラム、子どもフォーラムが始まるようで、ですから御当地におきますサミットは明日まで続くわけでございますが、ここで来年の開催地を引き受けました山口市といたしまして一言ごあいさつ申し上げます。

御当地、あるいは第1回の総社市さん、大変皆様方のお心尽くしと、御配慮で、立派にサミットが終わりました。第3回目を引き受けるとなりますと大変肩が重いような気がいたします。次はどのような知恵を出そうかということではなかなか知恵も出ないかもわかりませんが、来年はぜひ螢のシーズンに開催をいたしたいと考えております。山口市内には螢がたくさんおりますので、5月の終わりか6月の初めごろがいいかと思いますが、できれば螢も見ただけならというふうなつもりでおります。どうかぜひ来年は皆様お元気で山口でまた皆様方とお会いをする日を待ちながら、私どももいろいろ準備を一生懸命にやりたいと思っております。大変不行き届きなサミットになるかと思いたすけれども、一生懸命取り組みたいと思いたすので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

ありがとうございました。(拍手)

司会

ありがとうございました。

ここでゆかりの市長、町長様が退席されますので、どうぞ皆様、いま一度温かい拍手をお願いいたします。(拍手)

どうも皆様ありがとうございました。

本日、御参加の皆様方におかれましては長時間にわたり御熱心にお聞きいただき、心よりお礼申し上げます。

これをもちまして雪舟サミットを終わらせていただきます。

この後、午後1時30分より大野町、川崎町、総社市、山口市、益田市の子どもが描いた絵画コンクールの表彰式が行われます。

続いて、2時から子どもフォーラムが開催されます。子どもフォーラムは各市町の子どもたちが小郡、山口駅よりSLに乗って益田市に到着、この会館で郷土伝統芸能交流の発表を行い、交流を深めることになっております。どうぞ皆様、御参加くださいますようよろしくお願い申し上げます。